



|              |                                                                             |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------|
| Title        | アイコンをつくる : 貞照寺と貞奴縁起を中心に                                                     |
| Author(s)    | 森田, 雅子                                                                      |
| Citation     | デザイン理論. 2005, 47, p. 132-133                                                |
| Version Type | VoR                                                                         |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/53027">https://doi.org/10.18910/53027</a> |
| rights       |                                                                             |
| Note         |                                                                             |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## アイコンをつくる

### —— 貞照寺と貞奴縁起を中心に ——

森田雅子／武庫川女子大学

#### 1. 川上貞奴と貞照寺

本論では昭和8年(1933)に62歳の貞奴が建立した成田山貞照寺の堂羽目の物語と、貞奴が大正7年(1918)から昭和12(1937)年まで福沢桃介と同棲した〈二葉御殿〉などにある貞奴の遺品とを比較分析をする。

貞照寺は成田山不動尊信仰の深さをものがたる記念碑である。背景には歌舞伎界の市川宗家を中心とした成田山不動尊に対する元禄以来の深い結びつきに対する憧憬もある。貞奴は川上家とは福沢桃介との同棲故にうまくいっていなかった。貞照寺は、桃介との過去の記憶を暖め、祀り、最後の骸の置き場を確保する場だ。この寺を建立したのは貞自身の意図ではなかったと孫の川上初氏はいう。女が寺を建立するということには世間も何かと耳目を傍だてた。貞の将来を心配して、養子を取る事を勧めたのも桃介であって、子ができぬ貞奴に気を使い、自分の血筋の岩崎家の親戚筋を招請したわけである。しかし寺の建立は桃介・貞奴二人の強い願望であったと考える。「福沢桃介氏の為、一身犠牲の念願を籠め、空前の工事を完成せしむ。」と銘文にあり、功績の主体は貞である。つまり、本堂の堂羽目の木彫りは〈貞奴八霊験〉であり〈貞照寺縁起〉でもある。

貞奴と二人三脚の結果、桃介は木曽水系にダムを造成し、中部における電力事業の基礎を築いた。その大事業のダムも落成。共に戦った二人の関係も一段落した頃、桃介は大病を再発する。桃介は妻子のために東京へ戻ることとなり、名古屋東二葉町の〈二葉御殿〉を引き払う。今日貞奴の墓所は貞照寺本堂裏の

塚山にえぐられた石室にある。以下、貞奴の伝記の詳細については主に山口玲子(1993)、孫の川上初氏のヒアリング、欧文・和文の新聞記事、遺品等の分析による。

#### 2. 貞照寺堂羽目と貞奴

貞照寺の本堂は大本山成田山新勝寺旧本堂(現釈迦堂)を簡素化した造り。岐阜県各務原市宝積寺町に立地する。〈貞奴八霊験〉の堂羽目は本堂向かって左の西面から、北面、そして東面に続いて霊験図が八つ設えてある。全てに以下の様な題字が添えられている。

「大正十三年頃、木曽川を横断してダムを築き、水力電気を起さんとする福沢桃介氏の為、一身犠牲の念願を籠め、空前の工事を完成せしむ。」

つまり不動尊を祀る動機はダム事業が成功したからである。貞照寺を重要な送電先である大都市名古屋近く供給源である木曽川水系を見守る鶴沼に建立したのであり、発願は感謝と加護の祈願である。このように、堂羽目は新勝寺旧本堂棧唐戸の「孝」のテーマをはなれ、貞奴の奇跡にみちた自伝に終始する。

#### 3. 西洋的絵解きの要素：聖人の霊験縁起

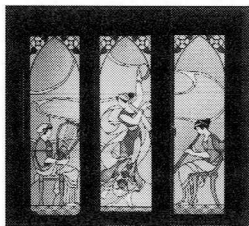


この堂羽目は貞奴が欧米渡航の際に何度も見たに違い無い西洋の教会などの壁画やステンドグラスの模倣であるとも考えられる。キ

リスト教の宗教観では全ての聖人の功德と奇跡はキリストの事蹟の前兆で、残照である。教会の内陣のステンドグラスや祭壇、説教壇周りの彫刻には寄進者の跪く小さな姿と共に、信仰の対象の聖人達の生い立ち、殉教から昇天に至る奇跡や功德の生涯が絵解で示される。壁画やステンドグラスの絵解は numerological（数秘的）あるいは typological（予表論的）な世界観に裏打ちされた聖人の奇跡に鏤められた生涯を表す教具である。最も著名なものはシャルトル大聖堂のステンドグラスや彫刻、そしてエナメル装飾板に覆われたクロスターノイブルクのサイクルとされる。

日本の宗教画には寄進者の姿が描かれることは稀だ。霊験の主体の〈聖人〉であり、〈寄進者〉でもある貞奴。勿論背景には阿弥陀如来来迎図や成田山伝来の不動尊霊験図、絵馬図との折衷がある。そしてどの堂羽目でも飛来した一瞬の雲気文から貞奴に向う光をあらわす束〈光芒〉を使い、不動尊の霊験、寵愛と〈信託〉を表している。この光芒の現れ方もヨーロッパ的伝統に従えば、神の神託と寵愛を表す図像である。

#### 4. ステンドグラスと堂羽目



明治34年の福沢諭吉の死後、桃介は急速に貞に近づいていった。音二郎の死後、大正7年（1918）同棲を始める。この堂羽目板は貞奴が欧米渡航の際に見た西洋の教会などの壁画や巴里万国博覧会などで多用されたステンドグラスの模倣であるとも考えられる。二葉御殿にステンドグラスを幾枚もちりばめたの

はその傍証である。当時この名古屋城近くの武家屋敷の影の色濃い街に洋館を建てることは新進先取気鋭の風潮を現わすためにはぴったりであったにちがいない。ちなみに桃介は外車を使用した。

アールヌーボー様式の洋館は特徴的なマンサード屋根にオレンジ色の瓦を用いている。正面玄関横には内陣風出窓に半円錐形の屋根を冠している。玄関を経て大広間を入るとすぐ目に飛び込む〈床の寄せ木細工〉、見上げでの〈折り返し楕円階段〉、そしてアールデコの鋳物〈アイロンワーク〉の電燈飾りのある欄干。貞奴が大活躍した1900年パリ万国博覧会でも光学宮とその電飾は観衆を圧倒した。そして桃介の電力王の意地をみせる怪異な分電盤。しかし何よりも注目に値するのは堂羽目に好対象をなす数箇所設えられたステンドグラス。まず玄関横、そして書斎、そして客室。客室には花鳥風月の題材、二階書斎横には南アルプスの風景、そして貞奴の替紋の龍田楓。

玄関横のミューズのステンドグラスを飾るのはゼウスとムネモシケ（記憶）の娘であり、芸術・知識・靈感・詩作を掌る9人のミューズ（女神）たち。フルートをもつのは抒情詩の女神エウテルペ、堅琴を持つのは独唱歌を掌るエラト、中央でシンバルを持つのは合唱歌舞を掌るテルプシコーレか。ミューズの着衣は古代ギリシャの衣裳らしからぬ着物の打ち合わせと肌けた間着。テルプシコーレは貞奴の先祖なのである。芸者や女優は、ミューズ、巫女、白拍子の伝統文化継承者であり、芸術と靈感を掌るものだ。自分の偉業を称え、身分に対する疑念を打ち消す記念碑が貞照寺であった。堂羽目は貞淑を物語る。二葉御殿での西洋図像や様式は知見の広さをしたたかに見せ、彼女が芸術・芸能至上主義者であることを証明する。